

鴨川河岸からがわかわぎし

私たちだって……秘封倶楽部だって、それなりに女子なのだ……花の女子大生しているのだ……と、メリーは再確認する。

蓮子と連れ立っての外出、といっても、必ずしもオカルトやミステリーのたぐいが枕詞のようについてくる、ではなかった。ふたりは四條通しじょうにいる。京都を横に走る大通り、北から一条、二条……四番目の路。四条。いまや、京都きつての繁華街の、四条河原町。

鴨川の西側の岸……御池、三条から四条付近にかけての一带。とくに河原町との交差点にそびえ立つ二つのデパートには毎日たくさんの人が押し掛けていて、そこからさらに西に向かう……

木屋町、河原町、新京極、寺町……と、四条

に交つて縦に走る筋には、いつの時代もたくさんの商店が軒を争つてきた。きらびやかな若者向けのファッション・小物の店たちのすぐ隣には老舗の京漬物店が藍染の暖簾のれんを垂れ、レストラン、本屋、カフェ、ゲームセンター、観光客向けの土産物屋……かと思えば街中に突然ひよつこりと鳥居が据えられ、そのすぐ隣の寺社の門前では坊主が掃除をしながら、お経がわりと言うように流行りのバラッドを鼻歌で歌っている。

メリーたちは、この雑然とした、ひとびとのパワールの満ち満ちた一帯を駆けぬけた。

「メリー、買はずぎじゃない？」

蓮子の目はメリーの腕にぶら下がる紙袋に注がれている。その数、四つ。

「何言つてるのよ、季節の変わり目なんだから、今シーズンを着回せるくらい必要でしょう」

「去年の着りゃいいじゃない」

メリーは深く深く息を吐きながら首を振る。花の女子大生……とつぶやいてはみたが、目の前のオモシロ生物にはその自覚が限りなくゼロだ。

大阪の食い倒れ、京都の着倒れ……と蓮子が歌うようにつぶやく。やがてふたりは、雑然とした市街から、急に視界が開けるのに気付く。彼女らは四条大橋にいた。

「ね、蓮子、あれ」

河岸に立ち並ぶ料亭から棚のようにせり出しているのは、納涼床だ。夏の間だけ、お客はここで涼やかな鴨川の湖面を眺めながら料理やお酒に興じることができる。今は準備中といったところで、本格的にお客が入るのは、暑さも本番になるころだろう。

「そうじゃなくて、ほら……」

メリーが指差したのはその下。広々とした鴨川は豊かな水をゆつくりと海に向かって注ぎ、そのかたわら……河岸に、ひとびとが腰かけて談笑している。夕暮れも間近に迫り、川面のすぐそばはさぞ涼しいだろう。

「賀茂川等間隔の法則」

メリーの解き放ったワードに、う、と蓮子はうめく。それは有名な話で、この河岸に腰かけて愛を語らうカップルはなぜか一定の間隔を置いて並

ぶ、という現象のことを指している。いつからそんなったのか、いつ誰がそんな名前を付けたのか、とにかく、その現象は事実目の前に展開していて、その名前がついていた。

「本当にちゃんとそうなるのよねえ、何故か。誰が示し合わせたわけでもないのに」

「……私、そういうのきらいだなー。法則っていうんなら観測と実験と証明による再現性がないときもちわるいじゃない……パレートの法則とか、四色定理とか」

「四色定理は証明されてなかった？ それに、きもちのわるい目をしたあなたが言っても説得力がないわよ」

藍色の空に見えた一番星が、午後六時十二分〇五秒を蓮子に教える。なぜかわからないけれど、それはそうなっている。

「と、とにかく。我々はそういった気持ち悪い謎を暴くための倶楽部なのよ。こんなしようもない謎に負けてたまるもんですか」

「蓮子、あそこに混ざるような相手、いるの？」
鴨川の水も凍るか、と思われる空気が二人の間

を吹きすさぶ。

「……メリーこそ」

「……」

「……さつき、服いっぱい買ったでしょ。見せる人、いるの？」

「……」

「……」

「……」

「……私たちふたりで、混ぜってみる？」

「……やめよう。悲しすぎるわ……」

とはいえ、等間隔で語らっているのはカップルだけではなく、友人や家族連れもいるのだけれど、もう二人の空気がそういう妥協を許さなかった。

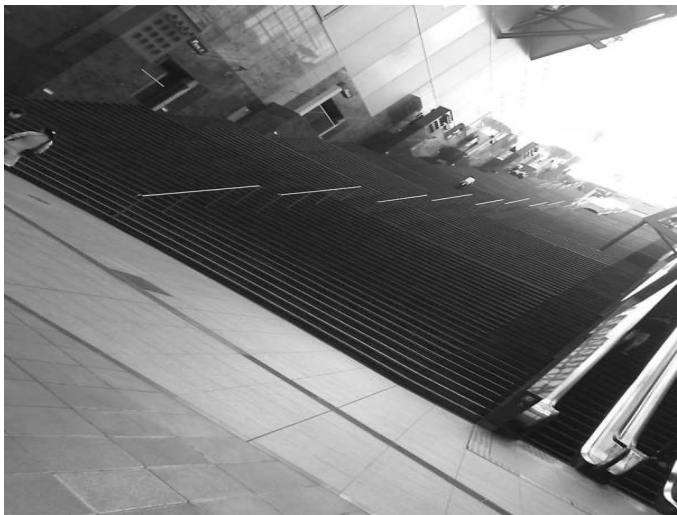
「よしメリー引き返そう。飲むわよ」

「えー……」

蓮子のしようもない熱を、鴨川の流れが冷やしてくれないかしら、と、手を引かれながら、メリーは思う。

● 鴨川沿い・四条大橋

京阪電鉄四条駅、あるいは阪急電車河原町駅地上出ですぐ。四条河原町の交差点には京都のパスのほとんどの系の路線が集まる。四条大橋から東を向くと、八坂神社が見える。



JR京都駅 大階段

JR京都駅が、京都の中心かというところ、決してそういう事はない。地理的には七條と九條の間。平安京は北に内裏、すなわち天皇の御所を置き、北から一条、二条……と道に名前を付けていったのだから、中心からの遠さは推して知れるだろう。また、京の都の内と外……洛中・洛外という話で言えば、その境界線として太閤秀吉が築いた『御土居』と呼ばれる土壁のぎりぎり内側、とはいえ、果ての果てだ。

文化的・経済的に言っても、御所と呼ばれた場所……天皇や将軍がいた場所は、はいずれも二条以北。京都市役所があるのは三疊のやや北、河原町御池。いちばんの繁華街は四条近辺であるし、いちばんのビジネス街は烏丸だ。

「東京からこっちに出て来るまでさあ、金閣寺と

か清水寺とか嵐山とか、京都の名所っていうのは京都駅を中心にしてギュッと集まっているものだと思ってたわ」

「そりゃあまあ、私の国だって、日本を知らない人は京都に日本の名所がなんでも集まってると思ってるわよ。知らない土地のイメージなんて、そんなものでしょう」

とはいえ、この駅こそが京都の玄関口であることは確かなことだ。他府県から人が京都にやってくるのも、京都の人が外に出てゆくのも、この駅なのだ。そういう意味で、中央口を出てすぐ見える京都タワーとともに、ひとつのシンボル……またはメルクマールと言っても差し支えはないだろう。

「それで、こんなところに呼び出して、どこかに遠出するの？ また蓮子の実家？ 旅の準備なんではないわよ」

「うふふ、そうじゃなくて……今日の活動場所がここなのよ」

京都は、景観を守るための条例が今も生きていて、例えば保護区域に指定されている場所では、

店舗の看板の大きさや色遣い、建造物の高さなどが細かく制限されている。京都の人々は、京都の京都らしい景観に商品的な価値があることを昔から知っていて、古き佳き京都の姿を保存するのに、労力を惜しまなかった。

「……っていう話だけれど、改めてよくよく見ると、これ、すごい建物よねえ」

「古き佳き時代の京都の人が見たら卒倒しちゃうわよ」

「そりゃあもう。建造が計画された当時だって、京都中の人たちが賛成と反対に分かれて大変だったらしいんだから」

その建物は巨大で、二十世紀における近代建築の粹を集めて建造されている。地上から見上げればはるかな高さの天井を支える支柱たちが、幾何学的な文様をえがいている。それはあたかも、モノクロ写真の町並みの中に突如として出現した、フルカラーの特異点だ。

「でも、結局受け入れちゃったのね」

「そうね。ほら、京都タワーだって、アレを見たら、ああ、京都に帰ってきた、って思えるじゃない

い？ 全然京都らしさのかけらもない建物なのに、よ……京都って、歴史があるからこそ何でも受け入れちゃえるわけで……単純に言えば、京都の人って、昔のものも好きだけど、新しいものももっと好き、っていうことじゃないかしら」

ふたりは駅の昇降口をくぐると、改札には向かわず、右に折れる。エスカレーターをのぼってゆき、視界が開けたかと思うと、目の前に現れるのは、気が遠くなりそうな段数を誇る大階段だ。

「百七十一段だって」

蓮子が言うと、メリーが立ちくらみを起こした。

「なんでこんな作ったのかしら……」

「へこたれてる場合じゃないわよメリー。ここが今日の活動場所なんだから」

「ええ……こんなところに、結界的なサムシングがあるのかしら……？」

「……出る、らしいわよ」

「えっ」

「幽霊的な。知り合いの霊能持ちの人が言った」
「本当に……？ 自殺のエピソードとか、ないでしょ？ 聞いたことないもの……歴史がすごくあ

るわけでもないし……」

「バカと煙と地縛霊……みたいな？ ……よくわからないけれど、不意に霊的なのが集まる場所って、できちゃうみたいよ？ 大阪の地下街の噴水

広場とか」

「変なところにたむろするなあ、霊」

「さあそうと決まれば、行くわよメリー！」

「ち、ちよつと蓮子……！ なんて走るの？ 別に駆け上がる必要ないじゃない！ 慌てなくても幽霊は逃げな、ふ、ふ、ふあ……！」

メリーの悲鳴が駅構内に響き、やがてそれは、駅を発つ電車の発車ベルにかき消された。

● J R 京都駅

J R の東海道線をはじめ、さまざまな路線から乗り入れられる。大階段へは、中央改札を出たところのエスカレータをのぼる。階段をのぼった先はちょっとした公園になっていて、京都の町を一望できる。

廻 とき 徒 るき
うよ 京 りらぶ
ぐる 京 りらぶ 歩